

報告

医療機器を使用した在宅看護論演習の成果 ～酸素濃縮器と人工呼吸器を使用した体験型演習での学びを通して～

山崎 律子¹⁾・波止 千恵¹⁾・新開 博²⁾

- 1) 純真学園大学 保健医療学部 看護学科
- 2) 前純真学園大学 保健医療学部 看護学科

Outcome of exercises using medical apparatus in Home Care Nursing Theory-through the learning in experience-based exercises using an oxygen concentrator and an artificial respirator

Ritsuko YAMASAKI¹⁾, Chie NAMITOMI¹⁾, Hiromu SHINKAI²⁾

- 1) Department of Nurse, Faculty of Health Science, Junshin Gakuen University
- 2) formerly Department of Nurse, Faculty of Health Science, Junshin Gakuen University

【要旨】 本研究の目的は、在宅看護論における演習のあり方を検討するために、医療機器を使用した体験型演習での学生の学びを通して、その成果について明らかにすることである。

方法は、A大学の在宅看護援助論を受講した93名のうち、本研究の同意が得られた学生69名のレポートを研究対象とした。レポートは演習終了後に提出された「医療機器を使用する療養者体験および看護師体験を通しての学び」について記述したもので、これらの学びの記述内容を本研究3名で分析した。

分析した結果、10カテゴリー、30サブカテゴリーが抽出された。抽出されたカテゴリーを演習目標ごとに分類すると、医療機器使用上の注意点は、【機器の特徴】や【機器を安全に使用するために必要な援助】、観察のポイントは、【観察内容】と【機器を使用する療養者の特徴】、療養者の気持ちや生活課題は、【機器使用によるQOLへの影響】や【機器を使用する療養者の想い】、【機器装着による効果】、関係する職種とその役割については、【各職種の役割】、【看護師として必要な能力】で、全ての目標に対して学びの記述があった。

医療機器を使用した体験型演習を行ったことで、特に【機器の特徴】、【機器を使用する療養者の想い】、【機器を安全に使用するために必要な援助】について学んでおり、今後はフィードバックの必要性が示唆された。

キーワード： 在宅看護論、体験型演習、成果、学び、医療機器

Abstract: The purpose of this study is to clarify the outcome of students' learning in experience-based exercises using medical apparatus, in order to discuss ideal exercises in Home Care Nursing Theory. The method was to study the reports written by 69 students who agreed with this research out of 93 students who attended Home Care Nursing Theory at University A. Their reports submitted after the exercises were about "learning through the experience as a patient and as a nurse using medical apparatus," and 3 co-authors analyzed them.

As a result of the analysis, 10 categories and 30 subcategories were extracted. The extracted categories were classified, according to the goals of exercises, into "characteristics of apparatus" and "necessary support for using apparatus safely" for notes for the use of medical apparatus, "observation contents" and "characteristics of a patient using apparatus" for the points of observation, "influence of the use of apparatus on QOL," "thoughts of a patient using apparatus," and "effects of apparatus" for the thoughts of patients and the issues in their living, and "roles of each occupation" and "necessary skills as a nurse" for related occupations and their roles. For all goals, some learning contents existed.

Through the experience-based exercises using medical apparatus, the students learned mainly "characteristics of apparatus," "thoughts of patients using apparatus," and "necessary support for using apparatus safely." This exercises indicates the necessity of feedback.

Keyword: Home Care Nursing Theory, experience-based exercises, Outcome, learning, medical apparatus

I. 諸言

わが国は急速な少子高齢化の進行に伴い、社会保障・税一体改革における医療の方向性として、在宅医療の推進およびチーム医療の推進が法的に位置づけられ¹⁾、在宅医療への移行が加速している。さらに、医療依存度の高い在宅療養者が増加しており、中でも人工呼吸器を使用しながら在宅で療養する者の割合が高くなっている²⁾。加えて、在宅酸素療法を行っている者も約16万人いると推定されており³⁾、今後、機器を使用した呼吸療法を必要とする在宅療養者の増加が予測される。

このような中、在宅医療を支える訪問看護師を2025年までに、現在の3倍程度に増やすことが目標とされ、新卒の訪問看護師の確保が期待されている⁴⁾。そのため、入院中から療養者や家族への指導が必要となるこれらの医療機器を使用する療養者への看護については、訪問看護師など在宅看護に関わる者ばかりでなく、病院や診療所に勤務する看護師にとっても学んでおく必要のある看護技術といえる。

また、2007年の「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」で、「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」が検討され、呼吸・循環を整える技術において、酸素吸入療法や人工呼吸器装着中の患者の観察について項目が設定されており、講義や演習方法を検討する必要性が高いといえる。

一方、在宅看護論は、1997年に看護基礎教育において科目として位置づけられ、在宅支援体制確立に向けた教育が行われるようになった。その後、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」で、在宅看護論は「地域で生活しながら療養する人々とその家族を理解し、在宅での看護実践の基礎を学ぶ内容とする。また、終末期看護も含め、在宅での基礎的な技術を身につけ、他職種と協働する中で看護の役割を理解する内容」であると述べられた。このことは、看護基礎教育において、在宅での基礎的な技術ばかりでなく、チームアプローチにおける他職種の理解を通して、看護の役割を理解することが求められるようになってきたと考えられる。

これまでに在宅看護論における技術教育に関する研究では、在宅における日常生活援助技術⁵⁾や看護過程の展開の評価に関する研究⁶⁾はあるもの

の、医療機器を使用した演習に関する先行研究は少ない。また、看護技術に関する研究は、看護技術到達度^{7,8)}や教材開発⁹⁾、清潔ケア^{10,11)}に関連する研究が多い。

今回、在宅看護論の演習を医療機器メーカー（以下、業者）の協力のもと行い、多くの示唆を得ることができた。そこで、在宅における医療機器を使用する療養者の看護を考えるための演習方法を検討するために、酸素濃縮器と人工呼吸器を使用した体験型演習での学生の学びを通して、その成果を明らかにすることを目的として、本研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 対象

2015年5月 A 大学の在宅看護援助論を受講した93名のうち、本研究の同意が得られた学生69名のレポートを研究対象とした。レポートは演習終了後に提出された「医療機器を使用する療養者体験および看護師体験を通しての学び」について800字以上1200字未満で記述したものである。

2. 方法

レポートの記述内容を本研究3名で分析した。まず、記述内容から学生の学びの記述について、主語と述語からなる単文を記録単位としてコード化した。学びの記述と3名の合意が得られたコードを有効なデータとして、2名の研究者が各自でデータをサブカテゴリー化して、3名の研究者で合意が得られるまで検討を重ねた。そして、合意の得られたサブカテゴリーを再び2名の研究者が各自でカテゴリー化し、3名の研究者で合意が得られるまで検討しカテゴリー名をつけた。得られたカテゴリーを3名の研究者で4つの目標に応じて分類し、集計した。なお、「学び」とは、在宅看護援助論の演習で得られた新たな知見や気づきをいう。

3. 倫理的配慮

在宅看護援助論評価終了後、対象者に研究目的及び方法、本研究への参加の有無が成績評価に影響することがないことについて文書を用いて口頭で説明し、「研究同意書」の提出によって同意が得られたものとした。同意が得られた学生のレポートは、個人が特定されないよう、番号で表記

しデータとした。なお、本研究は純真学園大学倫理委員会の承認を得て行った。(承認番号27-07)

Ⅲ. 演習の概要

1. 演習の時間数

在宅看護援助論は、2単位60時間の演習科目で、在宅酸素療法および在宅人工呼吸療法中の療養者への看護に関する講義を90分、演習を180分で行った。在宅看護援助論では、自宅やそれに準じた環境で療養生活をしている新生児から高齢者までを対象に、生活の質の向上を図るため療養者および家族のニーズに応じた日常生活援助方法や医療処置を伴う看護援助方法を学ぶことを目的としている。医療処置については、14時間の中で在宅酸素療法や人工呼吸器療法以外に経管栄養や褥瘡、膀胱留置カテーテルや人工肛門について授業を展開している。

2. 演習目的および目標

演習目的は、「医療機器に直接触れ、体験することによって医療依存度の高い療養者や機器の特徴を知り、在宅療養における医療機器の管理や必要な看護を学ぶ」である。演習目標は、「医療機器を使用するための注意点を述べることができる」(以下、医療機器使用上の注意点)、「医療機器を使用している療養者の観察のポイントを述べる」(以下、観察のポイント)、「医療機器を使用しながら在宅で療養している療養者の気持ちや生活上の課題について述べる」(以下、療養者の気持ちや生活課題)、「医療

機器を使用しながら在宅で療養している療養者に関する職種やその役割について述べる」(以下、関係する職種とその役割)の4つである。

3. 演習方法(図1)

演習を行う前週に、各機器の適応条件や在宅酸素療法および在宅人工呼吸療法中の療養者への看護に関する90分の講義終了後、体験型演習に学生が療養者に起こっていることを自身のこととして関心に向け、興味をもって積極的に参加できるよう、療養者や介護者になった状況を想起して困ることを記述する事前課題を課した。演習は業者の協力のもと、酸素濃縮器および非侵襲的陽圧換気療法装置、持続式陽圧呼吸療法装置を準備した。二会場に3種類の機器を設置して、各機器に1~2名の業者を配置した。学生は、一会場に15~16名の3つのグループを作り、療養者役および看護師役となるようペアとなった。各ブースの業者が業者役となり、機器の説明を受けながら、看護師役の学生が療養者役の学生に機器の装着を行った。学生は全ての機器を体験した。なお、業者とは演習前に目的および目標、演習方法について打ち合わせを行い、当日の運営方法について話し合った。また、演習当日に学生の提出した事前課題の記述をもとに学生のレディネスについて説明した。

Ⅳ. 結果

抽出した有効な記録単位数は1109であった。分析した結果、10カテゴリー、30サブカテゴリーが

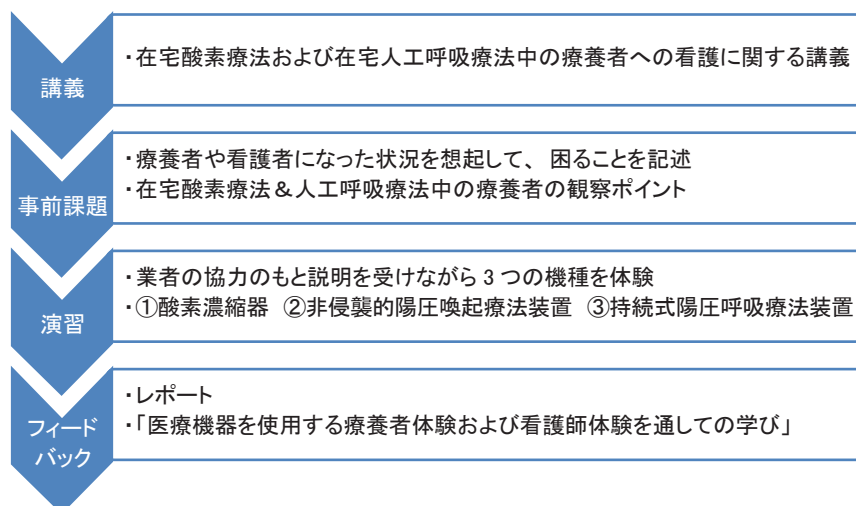


図1. 演習の展開方法

抽出された。以下、カテゴリーを【 】で、サブカテゴリーを〈 〉で示す。

抽出されたカテゴリーを演習目標ごとに分類すると、目標1の医療機器使用上の注意点は、【機器の特徴】と【機器を安全に使用するために必要な援助】、目標2の観察のポイントは、【観察内容】と【機器を使用する療養者の特徴】、目標3の療養者の気持ちや生活課題は、【機器使用によるQOLへの影響】と【機器を使用する療養者の想い】、【機器装着による効果】、目標4の関係する職種とその役割については、【各職種の役割】と【看護師として必要な能力】となり、全ての目標に対して学びの記述があった。さらに、目標にはない【学習方法の効果】について学んでいた。(表1)

1. 医療機器使用上の注意点について

目標1の医療機器使用上の注意点については、【機器の特徴】について学んでおり、全てのカテゴリーの中で270件と最も多く学んでいた。その中でも機器のコンパクトさや操作の簡単さなど<機器のもつ特徴>について最も学んでいた。次に異常時の警報機能や機器の情報管理機能など<機器本体の管理機能>について学んでいた。そして、各機器の<機器のしくみ>について学んでいた。【危機を安全に使用するために必要な援助】は、241件で、3番目に多いカテゴリーであった。その中でも安全な設置場所や火気厳禁など<機器の安全管理>について最も多く学んでいた。次に療養生活指導や適応までのケアなどの<装着中の援助方法>、マスクの装着技術、療養者の危機管理能力に応じた指導方法などの<装着時の援助方法>、看護師と業者、医師と業者の連携などの<チームアプローチ>であった。<導入時の援助方法>や<精神的支援>、<退院時の援助方法>の入院中に必要とする援助は学びが少なかった。

2. 観察のポイントについて

目標2の観察のポイントについては、【機器を使用する療養者の特徴】が87件と多かった。これには、それぞれの機器の適応基準など<療法の対象者>と睡眠時無呼吸症候群療養者の特徴や療養者の呼吸状態の特徴など<療養者の特徴>の2つのサブカテゴリーがあった。【観察内容】については、酸素ボンベの残量やマスクの空気漏れなどの<機器の観察内容>と呼吸状態の観察などの<療

養者の状態の観察内容>であった。

3. 療養者の気持ちや生活課題について

目標3の療養者の気持ちや生活課題については、244件と全てのカテゴリーで2番目に多い【機器を使用する療養者の想い】について学んでおり、その中でも呼吸苦や流入感、カニューレの装着時の違和感などの<使用時の体感>が181件と最も多かった。次いで、【機器使用によるQOLへの影響】の中の活動制限のなさや会話、食事、入浴が可能など<機器使用により今まで通りの生活を送れること>、会話のしづらさや食事摂取の困難さなどの<機器装着によって生じる日常生活の制限>、電気代、旅行中の酸素供給のための負担料などの<経済的負担>について学んでいた。

4. 関係する職種とその役割について

目標4の関係する職種とその役割については、引火防止や感染予防に関する指導など<看護師の役割>、緊急時の対応や定期点検など<業者の役割>、受診や療養者自身の異常の早期発見など<療養者の役割>、流量の指示など<医師の役割>、<医師と業者の役割>の【各職種の役割】について学んでいた。そして、その中で最も多かった看護師について【看護師として必要な能力】について、医療機器に関する基礎知識や社会資源の理解など<看護師に求められる能力>と療養者の立場を考慮した援助など<今後の事故の課題>が16件あった。

V. 考察

1. 体験型演習による学びの特徴

今回の演習は、業者に機器を用いて参加してもらい、学生が在宅で療養する療養者の立場になって、療養者のことやその生活状況をイメージできることをねらいとしていた。その結果、目標1の【機器の特徴】や目標3の【機器を使用する療養者の想い】について学生は特に学んでいた。これは演習が体験型であり、学生が直接、機器に触れ、自身の身体を通して多くのことを感じたことによって、講義で学びイメージしていたことと違って、強く印象に残り、学んだこととして言語化したのではないかと考える。

特に記述の多かった【機器を使用する療養者の想い】の<使用時の体感>では、呼吸苦やカ

表1. 実習目標と学びの内容

演習目標	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
1. 医療機器を使用するための注意点を述べることができる。	機器の特徴(270)	機器の仕組み(64)	HOTの仕組み・CPACの仕組み・NPPVの仕組み等	
		機器のもつ特徴(126)	機器のコンパクトさ・操作の簡単さ・電源の必要性・マスクの特徴等	
		機器本体の管理機能(80)	異常時の警報機能・機器の情報管理機能・機器の安全管理機能等	
	機器を安全に使用するために必要な援助(241)	導入時の援助方法(14)	対象者に応じた機器選択・機器管理方法の説明等	
		装着時の援助方法(39)	マスクの装着技術・療養者の機器管理能力に応じた指導方法等	
		装着中の援助方法(78)	療養生指導・適応までのケア・中断させないための援助等	
		退院時の援助方法(2)	在宅療養開始後の生活を想定した援助・呼吸器リハビリテーション	
		精神的支援(6)	ボディイメージの変化に伴う援助・身体拘束感への援助	
		機器の安全管理(79)	安全な設置場所・火気厳禁・加湿器に入れる水の種類等	
		チームアプローチ(23)	看護師と業者の連携・医師と業者の連携・多職種連携の大切さ等	
2. 医療機器を使用している療養者の観察のポイントを述べるができる。	観察内容(29)	療養者の状態の観察内容(10)	呼吸状態の観察・SpO2の変化	
		機器の観察内容(19)	酸素ボンベの残量の確認・マスクの空気漏れ等	
	機器を使用する療養者の特徴(87)	療養者の特徴(33)	睡眠時無呼吸症候群療養者の特徴・療養者の呼吸状態の特徴等	
		療法の対象者(54)	CPAPの適応基準・HOTの対象者・NPPVの対象者等	
3. 医療機器を使用しながら在宅で療養している療養者の気持ちや生活上の課題を述べるができる。	機器使用によるQOLへの影響(93)	機器使用により今まで通りの生活を送れること(49)	活動制限のなさ・会話や食事・入浴が可能・社会復帰の可能性等	
		機器装着によって生じる日常生活の制限(27)	会話のしづらさ・食事摂取の困難さ・体動制限等	
		経済的負担(17)	診療報酬の仕組み・電気代・旅行中の酸素供給のための負担料	
	機器装着による効果(23)	装着による心身への効果(22)	良眠効果・悪化防止効果・ストレス軽減等	
		経済的効果(1)	介護や経済的負担の軽減	
	機器を使用する療養者の想い(244)	使用時の体感(181)	呼吸苦・流入感・カニューレ装着時の違和感・同調のむずかしさ等	
		健康の大切さの自覚(1)	健康でいることの大切さ	
		療法中の療養者を推し量った想い(62)	療養者の負担感・24時間緊急時対応することによる安心感等	
	4. 医療機器を使用しながら在宅で療養している療養者に関する職種やその役割について述べるができる。	各職種の役割(80)	医師と業者の役割(1)	医師の指示に基づく流量設定と業者のボンベ準備
			医師の役割(6)	流量の設定など
看護師の役割(45)			引火防止指導・外出時の感染予防指導・不安の軽減等	
業者の役割(15)			旅行中の酸素供給体制・緊急時の対応・定期点検等	
療養者の役割(13)			受診すること・療養者自身の移乗の早期発見等	
看護師として必要な能力(39)		看護師に求められる能力(23)	医療機器に関する基礎知識・社会資源の理解・アセスメント力等	
		今後の自己の課題(16)	療養者の立場を考慮した援助・不安を軽減するための知識等	
目標以外	学習方法の効果(3)	経験することの大切さ(3)	見て触れることの大切さ・体験することの意義	

ニューレ装着時の違和感を、【機器使用によるQOLへの影響】において、会話のしづらさや食事摂取の困難さなど<機器装着によって生じる日常生活の制限>を感じていた。藤岡は、シミュレーションを用いる際の留意点として「負の体験」に偏らないようにすることを指摘している¹²⁾。今回の体験によって、学生たちは「負の体験」をしているものの、活動制限のなさや会話・食事・入浴が可能など<機器使用により今まで通りの生

活を送れること>、良眠効果や悪化防止効果など<装着による心身への効果>についても学んでおり、「負の体験」に偏ってはいなかった。そして、<療法中の療養者を推し量った想い>についてもメリット・デメリットについて学んでおり、【機器を使用する療養者の想い】を通して、目標3の「医療機器を使用しながら在宅で療養している療養者の気持ちや生活上の課題」について学ぶことができていた。しかし、【機器を安全に使用する

ために必要な援助】の〈装着時の援助方法〉や〈装着中の援助方法〉において、手順中心の記述になっていたため、機器使用によって療養者に生じる苦しみや違和感を軽減できるような援助について考えてもらえるような振り返りを行う必要があったと考える。

今回、演習を行う前週に講義を行い、各機器の適応条件や援助方法について説明していた。その結果、演習における学びでも〈療法の対象者〉や〈機器の安全管理〉など学べており、講義内容について演習を通して、より理解を深めることができたと考える。

また、学生が療養者や家族の立場になり体験してもらえるように、自分自身が在宅酸素を必要な状態になった時、大切な人が人工呼吸器を装着することになった時を想定して、疑問点を述べてもらう事前課題を出した。これは、外的動機づけの目的でもあったが、療養者に起こっていることを自分自身のこととして関心を向け、考えることを目的としていた。なぜなら、ナイチンゲールが「自分自身ではけっして感じたことのない他者の感情のただなかへ自己を投入する能力を、これほど必要とする仕事はほかに存在しない」¹³⁾と述べているように、看護師にとって他者の立場になって考えることは必要不可欠なことだからである。また、教育手法のひとつであるアクティブラーニングの第一歩として、「自分のこととして考えることが必要」¹⁴⁾といわれており、看護師として、また、教育手法として療養者に生じている現象を自身に置き換え捉えようとする姿勢は重要である。

そして、演習中に学生がその疑問点を質問することを想定して、事前に業者と打ち合わせを行った。今回、その疑問内容について研究対象とはしなかったが、演習中、学生は自身の疑問を解決するために業者へ質問をしていた。これらの学生の行動から事前課題を課したことによって、内的動機づけとなり、演習に対して積極的に取り組めたのではないかと考える。

今回の演習を通して、学生は業者の存在を知る機会となり、〈看護師の役割〉ばかりでなく、〈業者の役割〉や〈チームアプローチ〉についても学ぶことができていた。これは、教員が技術の確

認を行っていた今辻ら¹⁵⁾の研究において、業者の役割やチームアプローチに関する学びはなかったことから、今回、業者が演習に参加したことで、〈業者の役割〉を学ぶ機会になったと考える。

2. 目標の達成度と今後の課題

演習の4つの目標全てにおいて学びの記述があった。医療機器に直接触れ、体験することによって医療依存度の高い療養者や機器の特徴を知り、在宅療養における医療機器の管理や必要な看護を学ぶことを目的とし、4つの目標を挙げ、講義、事前課題、演習という授業展開を行った。その結果、【機器の特徴】について最も学んでおり、次いで【機器を使用する療養者の想い】、【機器を安全に使用するために必要な援助】について学んでいた。今回、この学びをもとに在宅における看護について具体的な計画を立案することは行わなかった。学生が機器や対象の特徴を理解できたことを考えると、【機器を安全に使用するために必要な援助】をもとに、計画を立案できたのではないかと考える。演習は「講義と臨地実習との中間にあり、学んだ知識を活用し、実際に行動するためにリハーサルと看護実践に必要な技術の習得がねらいである」¹⁶⁾ことを考えると、看護計画を立案することで、より実践的で臨地実習に活かすことのできる演習になったのではないかと考える。また、演習を180分で行ったため、フィードバックを充分に行うことができなかった。幸山は、「ロールプレイにおいて、フィードバックは重要である」¹⁷⁾と述べている。レポートという個人でフィードバックする方法だけでなく、意図的に教員がフィードバックすることで、学生が体験して得られた洞察を通して、より学びを深めることができるかと考える。

現在、推進されているチーム医療は、病院においても在宅においても欠かせなくなってきた。今回、学生は〈看護師の役割〉ばかりでなく、〈業者の役割〉や〈療養者の役割〉、〈チームアプローチ〉についても学ぶことができていた。しかし、学生は看護師役、療養者役となり、機器を体験したものの、業者から教えてもらう場面が多く、療養者や看護師役になりきることができなかつたと考えられる。そのため、学生に業者がチームの一員という意識づけができず、〈業者の役割〉が

15件と少ない記述となったと考える。今後は場面設定を行い、学生にロールプレイの目的や方法について具体的に説明し、終了後はフィードバックすることで、よりロールプレイの効果を発揮する必要があると考える。

また、〈今後の自己の課題〉が16件と少なかったことから、体験したことから学びはあるものの、自己の課題の発見には十分至らなかった。演習における自己の課題の明確化は内的動機づけとなり、在宅看護論実習での学びを深化させることができると考えるため、演習の目標に挙げ、取り組むことが重要であると考えられる。

VI. 研究の限界

本研究は、演習後の学生の学びのレポートから演習の成果を検討した。学びのレポートは、学生の新たな知見や気づきに偏るため、演習目標ひとつひとつの達成状況は明確にならない。今後、目標ごとの学びの記述内容から検討することも必要であると考えられる。

VII. 結論

1. 演習目標ごとに分類すると、医療機器使用上の注意点は、【機器の特徴】と【機器を安全に使用するために必要な援助】、観察のポイントは、【観察内容】と【機器を使用する療養者の特徴】、療養者の気持ちや生活課題は、【機器使用によるQOLへの影響】や【機器を使用する療養者の思い】、【機器装着による効果】、関係する職種とその役割については、【各職種の役割】と【看護師として必要な能力】となり、全ての目標に対して、学びの記述があった。目標以外に【学習方法の効果】があり、10カテゴリーが抽出された。

2. 講義、事前課題、業者の協力のもと実際の機器を使用した体験演習およびロールプレイの順に演習を行ったことで、特に【機器の特徴】、【機器を使用する療養者の思い】、【機器を安全に使用するために必要な援助】について学んでおり、今後はフィードバックの必要性が示唆された。

謝辞

本研究にご協力して頂きました学生のみなさまに感謝申し上げます。また、演習に多大なるご協

力を頂きましたフクダライフテック九州株式会社のスタッフのみなさまに感謝申し上げます。

なお、本研究は第36回日本看護科学学会学術集会で発表した。

文献

- 1) 厚生労働統計協会編. 国民衛生の動向・厚生 の指標. 厚生労働統計協会, 東京, 64 (9), 189, 2017.
- 2) 厚生労働省. 第1回全国在宅医療会議. 2016-11-1 (最終)
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000129546.pdf>
- 3) 日本呼吸器障害者情報センター. 患者視点による在宅酸素の手引書作成事業 慢性呼吸器疾患の患者に関するアンケート調査報告書. 日本呼吸器障害者情報センター, 東京, はじめに, 2015.
- 4) 全国訪問看護事業協会. 訪問看護アクションプラン2025. 2016-11-1 (最終)
<https://www.zenhokan.or.jp/pdf/new/actionplan2025.pdf>
- 5) 吉川峰子, 関睦美, 廣部すみえ. 在宅日常生活援助技術演習の学びの特徴. 日本看護学教育学会誌, 24 (1), 89-100, 2014.
- 6) 宇多みどり, 成瀬和子. 在宅ケア論演習における学習効果 経時的状況設定における訪問看護疑似体験から. 神戸市看護大学紀要, 15, 35-45, 2011.
- 7) 福岡美紀, 津本優子, 宮本まゆみ, 他4名. 看護学生の基礎看護技術到達度の自己評価の実態. 島根大学医学部紀要, 37, 73-79, 2014.
- 8) 竹村真理. 臨地実習における卒業時看護技術到達度の現状と課題. 健康科学大学紀要, 11 (1), 155-161, 2015.
- 9) 岡本千尋, 滝内隆子, 小松妙子, 他2名. ブレンドイッドラーニングを用いた看護技術の習得支援の効果 学生アンケート結果から. 岐阜看護研究会誌, 岐阜, 7, 67-74, 2015.
- 10) 石川美智子. 基礎看護技術教育における「全身清拭」演習方法に関する検討. 独協医科大学看護学部紀要, 8, 89-97, 2015.
- 11) 鶴田晴美, 長谷川真美. 看護学生の陰部洗浄演習事基礎看護学実習後における発見の特徴. 東都医療大学紀要, 4 (1), 43-54, 2014.
- 12) 幸山靖子. ロールプレイ. わかる授業をつくる看護教育技法 (藤岡完治, 野村明美編.), 医学書院, 東京, 12, 2000.
- 13) Florence Nightingale. "Notes on Nursing: What it is, What it is not." new edition, revised and enlarged, Harrison, 59, Pall Mall, Book-seller to the Queen, London, 1860. [薄井坦子, "看護覚え書-看護であること・看

護でないことー, 現代社, 東京, 227, 2000.

- 14) 新井英靖, アクティブラーニング時代の看護教育, ミネルヴァ書房, 京都, 9, 2017.
- 15) 今辻由香里, 山下千波, 有田久美, 在宅医療機器を実際に使用した在宅看護論演習での看護学生の学び, 第37回看護教育, 464-466, 2006.
- 16) 佐藤みつ子, 「演習 (技術)」指導案, 看護教育における授業設計 (佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子), 医学書院, 東京, 86, 2010.
- 17) 幸山靖子, ロールプレイ, わかる授業をつくる看護教育技法 (藤岡完治, 野村明美編), 医学書院, 東京, 18, 2000.